

て、簡単なものではあるが、この系統の言語の数少ない文献の一つとして注目に値する。

といっても、本書は単なる言語資料の報告といったものではなく、クム語という一つの言語体系の構造言語学的な記述なのであって、その方法はいわゆる“item and arrangement”のモデルによっている。それは簡単にいえば言語の音韻体系、文法体系のそれぞれを、素な要素と結合法とその結合条件とによって記述できるような一つの代数系としてとらえる考え方であるが、本書では実際の記述にあたっては、“items”と“classes of items”とを相対的な関係にとらえて“items, classes of items and constructions (i.e. classes of arrangements of classes of items)”を記述することによって、音韻体系、文法体系それぞれの階層的な構造を下位から上位へと記述している。この記述方法自体に問題がなくはないが、ともかくこれでクム語の構造を抽象的にとらえることができ、たとえば言語の類型学的研究といったものには多いに役立つにちがいない。なお、そのためには全体の構造図を付すれば直観的な理解をより助けたかもしれない。

しかしそれでは具体的にクム語にどんな言い方があるか、ある意味をどのような形式で表わすかということとは本書からは十分にはわからない。形態論が実際には“constructions”の記述に終わっていて“items”あるいは“classes of items”のメンバーが僅かずつしか掲げられていないからである。本書の規模からいってやむを得ないことだとはいえ、せめて従来の報告書の glossary に相当する“morpheme inventory”を基礎語彙に関してだけでも掲げてほしかった。モン・クメール系の言語は東南アジア諸言語の比較言語学的研究において特に重要なのだが、そのためにはまず語彙資料が第一に必要なのである。

なお、これまでに著されたクム語に関する文献には本書にも言及されている H. Roux の論文のほかに H. Maspero: “Materiaux pour l'étude de la langue t'èng” BEFEO 47 (1955) pp. 457-507 があってこのテン語と本書のクム語とは単に方言的な関係にあるに過ぎないと思われるが、本書では全くふれられていない。Maspero の表記法が不完全であるだけに両者の具体的な関係についての言及があれば資料としての価値が大いに高まったであろうと思われる。

(三谷恭之)

李全壽:「馬來語言與文學」許雲樵輯南洋研究叢書『馬來語研究講座』新加坡世界書局, 1961. pp. 29~58.

シンガポール自治政府が成人教育を促進するために、南洋大学の教職員を動員、分担して1960年8月22日から1961年1月9日まで、シンガポール文化会館で週に一回行われた「マライ研究講座」のまとめがこれである。地理、経済、工業化問題等々、16編収められている論文の中に、上記がはいっている。

この論文は、8節から成っているが、第一節「語言的定義」、第五節「文學的定義」などがあるのは、よほど、市民一般を対象とした講座であつたらしく、このような大きな問題が短い講演の合間に充分述べられ得る筈がなく、全体から見ると蛇足の感を免がれない。さて、著者は、マライ文学を「旧文学」と「新文学」とに分け、更に夫々を Puisi (散文), Prosa (韻文) とに分類する。この「旧」と「新」とは何を根拠にしてこう分けたのか、第四節「馬來語文在馬來語的發展」を見ても、甚だ要領を得ない。然し、韻文を次の8種(それぞれを更に小分する)に分類する方法は、まだ問題があるにしても、一つの新しい試みといえる。1. Bidalan (諺語), 2. Carmina 或 Pantun Kilat (短詩或閃電詩), 3. Pantun (転喻式四行詩), 4. Talibun (多行 Pantun), 5. Seloka (諷刺詩或戲謔詩), 6. Gurindam (兩行諺詩), 7. Sha'er (史詩或敘事詩), 8. Bahasa Berirama (有施律的散文)。マライの四行詩、特に Pantun は一・三行、二・四行が脚韻を踏むところに特徴があり、中国の詩にもこれと似た平仄の法則があるために中国人の興味を引くらしい(編者の許雲樵にも「中国詩経与馬來班敦的比較研究」1963. という論文がある)。李全壽は Pantun を児童; 青年; 老年人 Pantun を三つに分ち、それを更に発想によって細分するという念の入れ方である。但し、Seloka の内の四行詩を戲謔詩と説明し、青年 Pantun にも諷諧詩があるところを見ると、その本質的、根本的な区別をどこでなすのか、それぞれに掲げられた例からは了解することが出来ない。各種の詩型を表わす用語を並べたて、唯それを小分類して見ても、結局は埒があかないのではないと思われる。韻文を分類し得るような用語があるにも拘らず、夫々の詩の持つところの内容は非常に錯綜している。その含む意味も李全壽の分類のようなきっちり

と型に嵌まったものではない。又、1. 諺語の(4)として掲げている Tamthil (加用引子的譬喩)に Lain dulang lain kaki, lain orang lain hati. (人心不同←盆が違えば脚も違うように人が違えば心も違う)を引用しているが、これは厳密に言って彼の説くように第一句が「引子」で第二句が「叙述」ではない。第二句は第一句の単なる繰り返しに過ぎない(参照: Banyak orang banyak muka-nya. 十人十色)。次のような例をこそ掲げるべきであろう。Biar lambat, asal selamat. (急がば廻れ←ゆっくりやれば、安全), Tahu makan, tahu simpan. (食べ方を知る者は、保つ法を知る)

マライの韻文は、もっと大局的、有機的見地からの考察がなされねばならない。分類を行うのに性急になったため、その説得力が弱い感じの論であるが、試みとしては面白い。なお、散文も5種に分類しているが、大体同じことがいえる。(崎山 理)

Elinor C. Horne: *Beginning Javanese*. Yale University Press, New Haven and London, 1961. xxiii + 560p.

Yale Linguistic Series として、今まで、Russian と Chinese とが出ていたが、表記のようにジャワ語がこれに加わった。本書はこの表題から想像されるような「初学者」のためだけの入門書では決してなく、ある程度のジャワ語の知識を持つものにも、大いに活用し得るだけの内容を備えている。この書を作るために相当数のインフォーマントを得て、正確を期したことが序文からも知れるし、内容の構成法も、最近、諸外国語の速成教育に適用されて相当の効果を示しつつある Language Laboratory (L. L.) 方式に従って述べられており、文法用語を中心としてそれを各項目に分け、説明するという従来の形式を全く採用していない。即ち、Lesson 1. WHO'S WHO, 2. WHAT'S WHAT, 3. DAILY ACTIVITIES... といった具合に、最初から会話でもって易から難へと進む仕組みになっているが、文法事項を調べるための索引も比較的良く作られてある。

ジャワ語には、周知の如く、やかましい敬語法があり、丁寧な用法を Krámá [krómɔ] (更に上流階級同志で用いるのを Krámá inggil), 卑近な用法を Ngoko と称え、ジャワ語学習者はまずこの難関にぶ

つかるのであるが、この書では各 Lesson を Section A, B と分け、同じ文例をそれぞれの用法によって示しているのも、これまでのこの点の説明に関してとかく難渋の多かった文法書に比べて、強調されて然るべきより良い試みといえるだろう。唯、欲をいえば、これを見開きの中に対照して収めればもっと利用し易かったらと思われる。なお、マライ・ポリネシア語全般にわたって tense の表し方がさほど厳しくなく、ジャワ語もその例に漏れないが、副詞の lagi が英語の-ing に当たるとして、Kowé lagi ora môtjô "you're not reading" のような例を示しつつ (p. 50, p. 427), Wông kuwi ora môtjô "That man isn't reading" (p. 317) の如き不統一を来たしているところもある。又、この著者は Locative forms という新しい項目を設定して、その中に受動形、能動形を分類しているが、その他にこれまでオランダ人によって "accidenteel Passief" と呼び習わされてきた k(e)...(an) をも含めさせている(マライ語にも同じ用法がある)。しかし、発生的にも機能的にもこれは本来の受動形とは異なる。Aku kélingan (←ilang) mugômugô. (Ng.) «私は希望を失った»。更に語根を名詞化する機能もある。kewarasan (←waras) «健康»。それ故に p. 437 に掲げられたこの項目の用法一覧表にも、k(e)...(an) は省いてあるが、元来、別に考察すべきものであろう。この用法は、発生的に自然界に存在する或る大きな力によって人間の無意識の内に引き起された行為を表現したと考えられ、その表現様式は今も残っている。

本書は、一貫して現在の日常会話を教えるのに目的があり、ジャワ文字など一切掲げていないし、又、それに伴うジャワ文学の例も殆んど載せられていない。これがこの大冊をして少々、物足りなさを感じさせる所以であるが、それを別にすれば、生きたジャワ語学書として推薦するに価する。(崎山 理)

E.C.J. Mohr & F.A. van Baren: *Tropical Soils. A Critical Study of Soil Genesis as Related to Climate, Rock and Vegetation*. Amsterdam, 1953. xiii + 473 + ix p.

共著者の一人 E. C. Mohr はオランダの土壌地質学者で、1905年から1920年にかけてバイテンゾルフ植物園の土壌地質研究所長として当時のオランダ領イン